

鹿踊りのはじまり

宮澤賢治

青空文庫

そのとき西にしのぎらぎらのちぢれた雲くものあひだから、夕陽ゆふひは赤あかく
 なゝめに苔こけの野原のほらに注そぎ、すすきはみんな白しろい火ひのやうにゆれて
 光ひかりました。わたくしが疲つかれてそこに睡ねむりますと、ざあざあ吹ふい
 てゐた風かぜが、だんだん人のことばにきこえ、やがてそれは、いま
 北きた上かみの山やまの方ほうや、野原のほらに行おこなはれてゐた鹿し、踊おどりの、ほんたうの
 精せい神しんを語かたりました。

そこらがまだまるつきり、丈たはたか高い草くさや黒くろい林はやしのままだつたとき、
 嘉か十じふはおぢいさんたちと北きた上かみ川がしの東ひがしから移うつつてきて、小ちいさな畑はたけ
 を開ひらいて、栗あはや稗ひえをつくつてゐました。

あるとき嘉か十じふは、栗くりの木きから落おちて、少すこし左ひだりの膝ひざを悪わるくしまし

た。そんなときみんなはいつでも、西の山の中の湯の湧くところへ行つて、小屋をかけて泊つて療すのでした。

天気の良い日に、嘉十も出かけて行きました。糶と味噌と鍋とをしようつて、もう銀いろの穂を出したすすきの野原をすこしびつこをひきながら、ゆつくりゆつくり歩いて行つたのです。

いくつもの小流れや石原を越えて、山脈のかたちも大き

くはつきりなり、山の木も一本一本、すぎごけのやうに見わ

けられるところまで来たときは、太陽はもうよほど西に外れて、

十本ばかりの青いはんのきの木立の上に、少し青ざめてぎらぎ

ら光つてかかりました。

嘉十は芝草の上に、せなかの荷物をどつかりおろして、栃と

粟あわとのだんごを出だして喰たべはじめました。すすきは幾いくむらも幾いくむらも、はては野原のほらいつぱいのやうに、まつ白しろに光ひかつて波なみをたてました。嘉十かじふはだんごをたべながら、すすきの中なかから黒くろくまつすぐに立たつてゐる、はんのきの幹みきをじつにりつぱだとおもひました。

ところがあんまりいっしやう一生いっしやうけん命めいあるいたあとは、どうもなんだかお腹なかがいつぱいのやうな氣きがするのです。そこで嘉十かじふも、おしまひに栃とちの団子だんごをとちの実みのくらゐ残のこしました。

「こいづば鹿しかさ呉けでやべか。それ、鹿しか、来きて喰け」と嘉十かじふはひとりごとのやうに言いつて、それをうめばちさうの白しろい花はなの下したに置おきました。それから荷物にもつをまたしよつて、ゆつくりゆつくり歩あるきだしました。

ところが少し行つたとき、嘉十はさつきのやすんだところに、
手拭てぬぐひを忘れて来たのに気がつきましたので、急いでまた引つ返ひかへ
しました。あのはんのきの黒い木立こたちがちき近くに見えてゐて、そ
こまで戻るもどぐらゐ、なんの事ことでもないやうでした。

けれども嘉十はびたりとたちどまつてしまひました。

それはたしかに鹿しかのけはひがしたのです。

鹿しかが少すくくても五六疋びき、湿しめつぽいはなづらをずうつと延のばして、
しづかに歩いてゐるらしいのでした。

嘉十かじふはすすきに触ふれないやうに気を付つけながら、爪つまだ立てをして、
そつと苔こけを踏ふんでそつちの方ほうへ行いきました。

たしかに鹿しかはさつきの栃とちの団子だんごにやつてきたのでした。

「はあ、鹿等あ、すぐに来たもな。」と嘉十は咽喉の中で、笑ひながらつぶやきました。そしてからだをかぐめて、そろりそろりと、そつちに近よつて行きました。

一むらのすすきの陰から、嘉十はちよつと顔をだして、びつくりしてまたひつ込めました。六疋ばかりの鹿が、さつきの芝原を、ぐるぐるぐるぐる環になつて廻つてゐるのでした。嘉十はすすきの隙間から、息をこらしてのぞきました。

太陽が、ちやうど一本のはんのきの頂にかかつてゐましたので、その梢はあやしく青くひかり、まるで鹿の群を見おろしてぢつと立つてゐる青いきものやうにおもはれました。すすきの穂も、一本づつ銀いろにかがやき、鹿の毛並がことにその日

はりつぽでした。

嘉十かじふはよろこんで、そつと片膝かたひざをついてそれに見みとれました。鹿しかは大きな環わをつくつて、ぐるぐるぐるぐる廻まはつてゐましたが、よく見みるとどの鹿しかも環わのまんなかの方に気きがとられてゐるやうでした。その証しょうこ拠こには、頭あたまも耳みみも眼めもみんなそつちへ向むいて、おまけにたびたび、いかにも引ひつぱられるやうに、よろよろと二ふた足あし三あし足あし、環わからはなれてそつちへ寄よつて行きさうにするのでした。

もちろん、その環わのまんなかには、さつきの嘉十かじふの柝とちの団子だんごがひとかけ置いてあつたのですが、鹿しかどものしきりに気きにかけてゐるのは決けつして団子だんごではなくて、そのとなりの草くさの上うへにくの字じに

なつて落ちてゐる、嘉十の白い手拭らしいのでした。嘉十は痛い足をそつと手で曲げて、苔の上にきちんと座りました。

鹿のめぐりはだんだんゆるやかになり、みんなは交る交る、前肢を一本環の中の方へ出して、今にもかけ出して行きさうにしては、びつくりしたやうにまた引つ込めて、とつとつとつとつしづかに走るのでした。その足音は気もちよく野原の黒土の底の方までひゞきました。それから鹿どもはまはるのをやめてみんな手拭のこちらの方に来て立ちました。

嘉十にはかに耳がきいんと鳴りました。そしてがたがたふるえました。鹿どもの風にゆれる草穂のやうな気もちが、波になつて伝はつて来たのでした。

嘉十はほんたうにじぶんの耳を疑ひました。それは鹿のことばがきこえてきたからです。

「ぢや、おれ行つて見で来べが。」

「うんにや、危ないじや。も少し見でべ。」

こんなことばもきこえました。

「何時だかの狐みだいに口発破などさ罹つてあ、つまらないもな、高で栃の団子などだよ。」

「そだそだ、全ぐだ。」

こんなことばも聞きました。

「生きものだがも知れないじやい。」

「うん。生きものらしどころもあるな。」

こんなことばも聞えましました。そのうちにたうたう一疋が、いかに
も決心したらしく、せなかをまつすぐにして環からはなれて、
まんなかの方に進み出ました。

みんなは停つてそれを見てゐます。

進んで行つた鹿は、首をあらんかぎり延ばし、四本の脚を引き
しめ引きしめそろりそろりと手拭に近づいて行きましたが、俄
かにひどく飛びあがつて、一目散に遁げ戻つてきました。廻り
の五疋も一ぺんにぽつと四方へちらけやうとしましたが、はじめ
の鹿が、ぴたりととまりましたのでやつと安心して、のそのそ
戻つてその鹿の前に集まりました。

「なちよだた。なにだた、あの白い長いやづあ。」

「縦たてに皺しはの寄よつたもんだけあな。」

「そだら生いぎものだないがべ、やつぱり蕈きのこなどだべが。

毒ぶす蕈きのこ

だべ。」

「うんにや。きのごだない。やつぱり生いぎものらし。」

「さうが。生いぎもので皺しわうんと寄よつてらば、年としよ老れりだな。」

「うん年としよ老れりの番ばん兵べいだ。ううはははは。」

「ふふふ青あを白しろの番ばん兵べいだ。」

「ううははは、青あをじろ番ばん兵べいだ。」

「こんどおれ行いつて見みべが。」

「行いつてみる、大だい丈じやう夫ぶだ。」

「喰くつつかないが。」

「うんにや、大丈夫だ。」

そこでまた一疋が、そろりそろりと進んで行きました。五疋はこちらで、ことりことりとあたまを振つてそれを見てみました。

進んで行つた一疋は、たびたびもうこわくて、たまらないといふやうに、四本の脚を集めてせなかを円くしたりそつとまたのばしたりして、そろりそろりと進みました。

そしてたうたう手拭のひと足こつちまで行つて、あらんかぎり首を延ばしてふんふん鼻いでりましたが、俄かにはねあがつて遁げてきました。みんなもびくつとして一ぺんに遁げださうとしましたが、その一ぴきがぴたりと停まりましたのでやつと安心して五つの頭をその一つの頭に集めました。

「なちよだた、なして逃にげで来きた。」

「噛かぢるべとしたやうだたもさ。」

「ぜんたいなにだけあ。」

「わがらないな。とにかぐ白しろどそれがら青あをど、

両りやう方ほうのぶぢだ

。

「にほひ匂ほひあなぢよだ、にほひ匂ほひあ。」

「やなぎ柳はの葉はみだいなにほひ匂ほひだな。」

「はでな、いきつ息吐いきつでるが、いき息いき。」

「さあ、そでば、きつ気付きつけないがた。」

「いこんどあ、おれあ行いつて見みべが。」

「い行いつてみる」

三番目の鹿がまたそろりそろりと進みました。そのときちよつと風が吹いて手拭がちらつと動きましたので、その進んで行つた鹿はびつくりして立ちどまつてしまひ、こつちのみんなもびくつとしました。けれども鹿はやつとまた気を落ちつけたらしく、またそろりそろりと進んで、たうたう手拭まで鼻さきを延ばした。こつちでは五足がみんなことりことりとお互になづき合つて居りました。そのとき俄かに進んで行つた鹿が竿立ちになつて躍りあがつて遁げてきました。

「何して遁げできた。」

「気味悪くなてよ。」

「息吐でるが。」

「さあ、息の音あ為ないがけあな。口も無いやうだけあな。」

「あだまあるが。」

「あだまもゆぐわがらないがつたな。」

「そだらこんだおれ行つて見べが。」

よばんめ しかで
四番目の鹿が出て行きました。これもやつぱりびくびくものです。
それでもすつかり手拭てぬぐひの前まで行つて、いかにも思ひ切つたら
しく、ちよつと鼻をはな手拭てぬぐひに押しつけて、それから急いで引つ込
めて、一いちもく目さんに帰つてきました。

「おう、柔やつけもんだぞ。」

「泥どろのやうにが。」

「うんにや。」

「草くさのやうにが。」

「うんにや。」

「ごまぎいの毛けのやうにが。」

「うん、あれよりあ、も少し硬すここわばしな。」

「なにだべ。」

「とにかぐ生いぎもんだ。」

「やつぱりさうだが。」

「うん、汗あせくさ臭いも。」

「おれも一ひと遍がへり行いつてみべが。」

五番目ばんめの鹿しかがまたそろりそろりと進すすんで行いきました。この鹿しかは

よほどおどけもののやうでした。手てぬぐひ拭うへの上うへにすつかり頭あたまをさげ

て、それからいかにも不審ふしんだといふやうに、頭あたまをかくつと動うごかしましたので、こつちの五疋ひきがはねあがつて笑わらひました。

向むかふの一疋ひきはそこで得意とくいになつて、舌したを出だして手拭てぬぐひを一つベろりと嘗なめました。にはかに怖こはくなつたとみえて、大おほきく口くちをあけて舌したをぶらさげて、まるで風かぜのやうに飛とんで帰かへつてきました。みんなもひどく愕おどろきました。

「ぢや、ぢや、噛かぢらへだが、痛いたぐしたが。」

「プルルルルル。」

「舌したぬ拔ぬがれだが。」

「プルルルルル。」

「なにした、なにした。なにした。ぢや。」

「ふう、あゝ、舌縮まつてしまつたよ。」

「なじよな味だた。」

「味無いがたな。」

「生ぎもんだべが。」

「なじよだが判らない。こんどあ汝あ行つてみる。」

「お。」

おしまひの一疋がまたそろそろ出て行きましました。みんながおもしろさうに、ことごと頭を振つて見てゐますと、進んで行つた一疋は、しばらく首をさげて手拭を嗅いでゐましたが、もう心配もなにもないといふ風で、いきなりそれをくわいて戻つてきました。そこで鹿はみなぴよんぴよん跳びあがりましました。

「おう、うまい、うまい、せいづさい取つてしめば、あどは何つても怖つかなぐない。」

「きつともて、こいづあ大きな 蝸 牛 の早からびだのだな。」

「さあ、いゝが、おれ歌うだうはなんてみんな廻れ。」

その鹿はみんなのなかにはいつてうたひだし、みんなはぐるぐるぐるぐる手拭をまはりはじめました。

「のはらのまん中の めつけもの

すつこんすつこの 栃だんご

栃のだんごは 結構だが

となりにいからだ ふんながす

青じろ番兵は 気にかがる。

あお ばんぺ
青じろ番兵は ふんにやふにや

ほ
吠えるもさなはいば 泣ぐもさなはい

や なが
瘠せで長くて ぶちぶちで

くぢ
どごが口だが あだまだが

ひでりあがりの なめぐちら。」

はし まは
走りながら廻りながら踊りながら、鹿はたびたび風のやうに進

んで、手拭を角でついたり足でふんだりしました。嘉十の手

拭はかあいさうに泥がついてところどころ穴さへあきました。

そこで鹿のめぐりはだんだんゆるやかにになりました。

「おう、こんだ団子お食ばかりだちよ。」

「おう、煮だ団子だちよ。」

「おう、まん円まるけぢよ。」

「おう、はんぐはぐ。」

「おう、すつこんすつこ。」

「おう、けつこ。」

鹿しかはそれからみんなばらばらになつて、四方しほうから栃とちのだんごを
 囲かこんで集あつまりました。

そしていちばんはじめに手拭てぬぐひに進すすんだ鹿しかから、一口ひとくちづつ団だ
 子んごをたべました。六疋びきめの鹿しかは、やつと豆粒まめつぶのくらゐをたべた
 だけです。

鹿しかはそれからまた環わになつて、ぐるぐるぐるぐるめぐりあるき
 ました。

嘉十かじふはもうあんまりよく鹿しかを見みましたので、じぶんまでが鹿しかのやうな氣きがして、いまにもとび出ださうとしましたが、じぶんの大おほきな手てがすぐ眼めにはいりましたので、やつぱりだめだとおもひながらまた息いきをこらしめました。

太たい陽やうはこのとき、ちやうどはんのきの梢こずゑの中なかほどにかかつて、少すこし黄きいろにかゞやいて居をりました。鹿しかのめぐりはまただんだんゆるやかになつて、たがひにせわしくうなづき合あひ、やがて一れつ列れつに太たい陽やうに向むいて、それを拝おがむやうにしてまつすぐに立たつたのでした。嘉十かじふはもうほんたうに夢ゆめのやうにそれに見みとれてゐたのです。

一みぎばん右みぎはじにたつた鹿しかが細ほそい声こゑでうたひました。

「はんの木ぎの

みどりみぢんの葉はの向もつき

ぢやらんぢやらんの

お日ひさん懸かがる。」

その水すゐ晶しやうの笛ふえのやうな声こゑに、嘉十かじふは目めをつぶつてふるえあがりしました。右みぎから二ふたばん目の鹿しかが、俄にはかにとびあがつて、それからからだを波なみのやうにうねらせながら、みんなの間あひだを縫ぬつてはせまはり、たびたび太陽たいやうの方ほうにあたまをさげました。それからじぶんのところところに戻るもどるやびたりととまつてうたひました。

「お日ひさんを

せながさしよへば、はんの木ぎも

くだけで光る

鉄のかんがみ。」

はあと嘉十もこつちでその立派な太陽とはんのきを拝みました。右から三ばん目の鹿は首をせはしくあげたり下げたりしてうたひました。

「お日さんは

はんの木の向き、降りでも

すぎ、ぎんがぎが

まぶしまんぶし。」

ほんたうにすぎはみんな、まつ白な火のやうに燃えたのです。

「ぎんがぎがの

「すすぎの中ながき立たちあがる

はんの木ぎのすねの

長なんがい、かげぼうし。」

五番目ばんめの鹿しかがひくく首くびを垂たれて、もうつぶやくやうにうたひだしてゐました。

「ぎんがぎがの

すすぎの底そこの日暮ひぐれかだ

苔こげの野のはらを

蟻ありこも行いがず。」

このとき鹿しかはみな首くびを垂たれてゐましたが、六番目ばんめがにはかくびに首くびをりんとあげてうたひました。

「ぎんがぎがの

すすぎの底そこでそつこりと

咲さぐうめばちの

愛えどしおえどし。」

鹿しかはそれからみんな、みぢかく笛ふえのやうに鳴ないてはねあがり、
はげしくはげしくまはりました。

北きたから冷つめたい風かぜが来きて、ひゆうと鳴なり、はんの木きはほんたうに
砕くだけた鉄てつの鏡かづみのやうにかゞやき、かちんかちんと葉はと葉はがすれあ
つて音おとをたてたやうにさへおもはれ、すすきの穂ほまでが鹿しかにまぢ
つて一しよにぐるぐるめぐつてゐるやうに見みえました。

嘉十かじふはもうまつたくじぶんと鹿しかとのちがひを忘わすれて、

「ホウ、やれ、やれい。」と叫びながらすすきのかげから飛び出しました。

鹿はおどろいて一度に竿のやうに立ちあがり、それからはやて吹かれた木の葉のやうに、からだを斜めにして逃げ出しました。銀のすすきの波をわけ、かゞやく夕陽の流れをみだしてはるかに渡るかに遁げて行き、そのとほつたあとのすすきは静かな湖の水脈のやうにいつまでもぎらぎら光つて居りました。

そこで嘉十はちよつとにが笑ひをしながら、泥のついて穴のあった手拭をひろつてじぶんもまた西の方へ歩きはじめたのです。それから、さうさう、苔の野原の夕陽の中で、わたくしはこのはなしをすすきとほつた秋の風から聞いたのです。

青空文庫情報

底本：「校本宮澤賢治全集 第十一巻」筑摩書房

1974（昭和49）年9月15日初版発行

1976（昭和51）年6月15日初版第2刷発行

※底本で、「鹿踊《しゝおどり》りの」となっていたところは、「鹿踊《しゝおど》りの、「」に改めました。

※旧仮名遣いの表記は、混在も含めて底本通りにしました。

入力：O B a K e

校正：渡瀬淳志

2003年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鹿踊りのはじまり

宮澤賢治

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>